

## 『クードルン』に見られる縮約形 その1

—sagenとlâzenを中心に『ニーベルンゲンの歌』との比較から—

武 市 修

### はじめに

これまで押韻文学なるがゆえのさまざまな表現形式、語形、とりわけ縮約形について中高ドイツ語(Mhd.)の主要な叙事文学作品を中心にきてきたが、本稿では『クードルン』<sup>1</sup>を取り上げ、動詞sagenとlâzenの縮約形と本来の形がいかに使い分けられているかを検討したい。その際『ニーベルンゲンの歌』<sup>2</sup>との比較の中で『クードルン』の語法上の特徴の一端を明らかにできればと思っている。

『ニーベルンゲンの歌』はクリエムヒルトのジーフリトへの強い愛と、ハゲネによって血縁の信頼を裏切られ最愛の人を奪われた彼女の復讐を軸に、壮絶な戦闘とすべての者の破滅に終わる凄惨な悲劇である。これに対し『クードルン』は、同じ英雄叙事詩の系譜に連なりながらも、ノルマンディーのハルトムオトによる不当な求婚と誘拐のため塗炭の苦しみを味わわされる主人公クードルンが、王女として毅然とした態度を守りとおし、最後にはすべての者を許しそれぞれの登場人物が収まるべきところに収まるという結末で終わる和解の物語として、前者とは対極をなす。H. クーン(Hugo Kuhn)の言うように、『ニーベルンゲンの歌』のアンチタイプとして意図された作品である<sup>3</sup>。

この作品は『ニーベルンゲンの歌』と同じくバイエルン・オーストリ

---

1 本稿で用いたテキストはKudrun. Hrsg. von Karl Bartsch. Neue ergänzte Ausgabe der fünften Auflage, überarbeitet und eingeleitet von Karl Stackmann. Wiesbaden 1980 (Deutsche Klassiker des Mittelalters)である(以下 Kudrunと記す)。

2 『ニーベルンゲンの歌』のテキストはDas Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. von Helmut de Boor, 20., revidierte Auflage, Wiesbaden 1972 (Deutsche Klassiker des Mittelalters)である。

3 Kudrun, XXXI.

アの文化圏で 1230/40 年ころ成立したとみられているが、これも作者不詳で、しかもこれを伝承する写本が有名なアンブラス英雄本のみである。この写本は 16 世紀初頭に神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世の命を受けて、ハンス・リート (Hans Ried) が 10 年この仕事に専念して中世のさまざまな作品を書き写したというものである。作品成立から 300 年近くも時代が離れ、しかもリートがまとまった手本を持っていたのか、もし持っていたとしたらそれがどんなものであったのかなど何も分かっていないため、『クードルン』の校訂本を作るのは至難の業である。我々のテキストは K. バールチュ (Karl Bartsch) の版を受け継ぎ、K. シュタックマン (Karl Stackmann) が可能な限りもとの版を守り、「与えられた材料をすべて十分比較考量し、伝承されたものから逸脱しすぎず、韻律上・言語上の標準的用法からも離れすぎないように努めて」<sup>4</sup> 編まれたものである。

さて、この作品の縮約形を押韻技法との関連で見えていくに当たって、その韻律について簡単に触れておかなければならない。『ニーベルンゲンの歌』と同じく『クードルン』も短行ふたつからなる長い行が 4 つで 1 節をなし、多くの場合、それぞれの短行の行頭に 1 音節から 2 音節の行首余剰音 (Auftakt) が置かれる。そして 1 行目から 4 行目まで、前行は前者と同様基本的には強弱交代の 4 つのタクトである。これに対し後行は、1 行目と 2 行目は『ニーベルンゲンの歌』と同じく 3 揚音で最後のタクトが休止しているが、3 行目はそれと異なり 4 つ目のタクトも満たされ、さらに 4 行目は原則として強音が 6 つあり、6 タクトとなっている。ただし、我々のテキストでは全 32 歌章 1705 節のうち 100 節はこの行の強音が 6 つでなく『ニーベルンゲンの歌』と同様 4 つであり、これらはとくに「ニーベルンゲン詩節」と呼ばれる<sup>5</sup>。

## 1. sagen の縮約形

『クードルン』においても『ニーベルンゲンの歌』とまったく同じよ

4 Ebenda, XC.

5 Enenda, XCf.

うにsagenの縮約形は、3人称単数過去のseite 1例を除いてもっぱら過去分詞に現われ、geseitは完了が9、受動が18の27例すべて行末で押韻に用いられている。その押韻相手はleitが12回、magetの縮約形meitが6回、reitが3回、arbeitとbreitが2回ずつおよびbereitとgemeitが1回ずつである<sup>6</sup>。本来の形は『ニーベルンゲンの歌』ではgesagetが12例中4度、gesagtが1例押韻に用いられているのに対し<sup>7</sup>、この作品ではgesagetが5度、すべて完了で行中に現われる<sup>8</sup>。これらの用例からいくつかを見てみよう(以下必要に応じて用例の下に韻律符号を添えて行のリズムを示し、当該形には下線を付す)。

- (1) Ir boten, ich sol iu lōnen daz ir mir habt geseit  
 dâ von mir ist entwichen mîn ungefüegez leit. (1566,1-2)  
 使者のみなさん、私の甚だしい苦しみが消え去るような伝言を  
 私に伝えてくれた御礼を皆さんに致しましょう。
- (2) Daz lobte der künic schiere, als uns ist geseit. (338,1)  
 我々に語り伝えられたところによれば、  
 王はそのことをすぐに約束した。
- (3) er brâhte zwei hundert degene. dem künige wart geseit,  
 daz si komen wæren mit helme und mit brünne. (272,2-3)  
 彼[= モールンク]は2百名の勇士を連れてきた。彼らが鎧兜に  
 身を包みやって来たことが王に告げられた。
- (4) Du bist mir komen rehte, daz sî dir geseit. (130,1)  
 お前が私のところへ来たのは私にとって好都合だ、  
 と言っておこう。

6 leit: 130,1. 148,1. 166,1. 213,1. 242,1. 338,1. 556,1. 707,1. 1365,1. 1498,1. 1566,1. 1586,1; meit: 9,1. 199,2. 243,2. 685,2. 1246,2. 1640,1; reit: 272,2. 304,2. 763,1; arbeit: 656,1. 1095,1; breit: 1100,1. 1373,2; bereit: 746,2; gemeit: 834,1.

7 武市修「中高ドイツ語に見られる語形の多様性 — 押韻技法の観点から縮約形を中心に —」 阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第42号 82~87 ページ参照。

8 123,3. 601,3. 794,2. 1243,3. 1677,2.

(5) Ez kunde erahten niemen, wie manige rîche wât

die von Môrlanden, als man uns gesaget hât,

| x̄ x̄ | - | - | x̄^ | x x | x̄ x | x̄ x | x̄^ |

liezen dâ belîben ze rossen den vil guoten. (1677,1-3)

我々に語り伝えられたところによれば、モールラントの一行が非常に立派な馬の他に、どれほど多くの豪華な衣装をそこに残していったか誰にも見積もることができないほどであった。

(1)から(3)はいずれも縮約形geseitがleitと押韻し、(1)は完了(2)と(3)は受動の例である。例(1)の2行目dâ vonのdâは関係代名詞の代わりをするもので、geseitの目的語になる先行詞を含んでおり、新高ドイツ語(Nhd.)ならさしずめsolches, wovonとでもなるところで、具体的にはsolche Botschaft, durch dieの意味である<sup>9</sup>。Mhd.では制約された条件の中で韻律を整え簡潔に行を満たすために、このような省略的な表現が多い。例(2)のist geseitはNhd.なら状態受動であるが、ここはNhd.の受動の完了に当たり、過去を表わす。Mhd.では受動の助動詞werdenの過去分詞wordenがまだほとんど使われないので、sînの現在+他動詞の過去分詞が必ずしも状態受動とは限らず、受身の現在も過去も表わされ得た。またwerdenおよびsîn+過去分詞による受動の区別もまだNhd.ほど明確でなく、この作品でもgeseitを用いた受動18例のうち8例<sup>10</sup>は例(3)のようにwerdenの過去との結びつきであり、時制上の両者の区別は明確にはできない<sup>11</sup>。

(4)は受動の要求語法の2例のうちのひとつであり、この場合はNhd.でもそうであるように、受動の助動詞はwerdenでなくsînが用いられる<sup>12</sup>。(5)は行中に現われるgesaget 5例のうちのひとつであり、他の4例とも同じようにこの形で強弱交代のリズムが保たれている。なお、この例の2行目の前行には1音節のタクトが連続しているが、このような1音節のタ

9 Vgl. Kudrun, Anm. von K. Stackmann zu 1566,2.

10 例(3)以外に 148,1. 199,2. 304,2. 685,2. 746,2. 763,1. 1356,1.

11 文法書にはsîn + 過去分詞を状態受動、werden + 過去分詞を動作受動として一応説明されているが、この区別は必ずしも完全にはできず、受動体系としてはまだ完結していないと述べられている(Vgl. Paul/Wiehl/Grosse: Mhd. Grammatik, § 324ff.).

12 もう1例もdaz si iu geseit (1373)とsîn+過去分詞である。

クトがかなり多いのがこの作品の特徴である<sup>13</sup>。

次にsagenの人称形について見てみよう。先に触れたように、ここでも『ニーベルンゲンの歌』と同じように縮約形が1例だけ見られるので、両者を挙げてそれから検討しよう。

(6) Waz sol ich gelouben mære? mir seitez Hildebrant:

今となっては何を信じればよいのか。 (Nib. 2334,1)

ヒルデブランドはわしにこう申したぞ、

(7) Hagenen den schaden man dô seite. (Kudr. 453,4b)

| x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x |

ハゲネにその時、船の損傷の様子が報告された。

『ニーベルンゲンの歌』ではseiteの唯一の例は上例のように、人称代名詞ezとの融合形で行中に現われる。これはB写本に抛る形で、A, C写本ではsagteであり、他の行中の例との整合性からここもそれらの写本に抛りsagteを採る方がよいと先の論考で提言した<sup>14</sup>が、『クードルン』では他に写本がなく比べようがないし、また、次行のunbereiteと押韻するためにこの形を採らざるを得ない。F. ボイムル(Franz H. Bäuml)によれば<sup>15</sup>、他のすべての刊本がこの形を採っているが、彼自身の版ではsaitとし、前の行の最後もunberaitとしている。

その他の人称形では縮約形でない3人称単数形が非常に多く、sagetが17例、sageteが30例、前つづりの付いたgesageteが1例、アクセントのない末尾母音が省かれた過去形sagteが2例見られる。これらについてもいくつか検討してみよう。

(8) Die Hetelen recken, den boten saget man daz,

x | x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x | x̂ x |

daz si vorhten gar kleine ir zorn und ir haz. (773,1-2)

ヘテレの武士たちは彼らの怒りや憎しみなど

13 Vgl. Kudrun, XCI.

14 武市修 前掲書 87 ページ参照。

15 KUDRUN Die Handschrift. Hrsg. von Franz H. Bäuml. Berlin 1969, S. 169.

まったく恐れないと使者たちにきっぱり述べられた。

- (9) genuoge, den man ez sagete, die gerten ir ze wibe nimmer mêre.

x | x̂ ˘ ˘ | x̂ x | x̂ x | x̂ ^ (202,4)

この話を伝え聞いた多くの者はもう彼女を

妻にしたいなどと思わなくなった。

- (10) gâch was ir in daz venster. si sagete der meide danc/ ...

x | ˘ ˘ ˘ ˘ | x̂ x | x̂ ^ (1358,2)

彼女は窓辺に急いだ。彼女はその乙女に

(この嬉しい知らせの)お礼を言った。

- (11) noch daz ir muoter Hilden niemen sagte daz mære,

| x̂ x | x̂ ˘ ˘ | - | x̂ ^

daz er alsô tougenliche <...> in ir kemenâten wære. (391,3-4)

また、彼がそんな風に密かに彼女の部屋に来ることを

彼女の母ヒルデに誰も言わないようにして

- (12) vil manic ritter edele, der nimmer mër diu mære

gesagete in sînem lande, wie im in dem strîte gelungen wære.

x | ˘ ˘ x | x̂ x | - | x̂ ^ (511,3-4)

非常に多くの高貴な騎士たちはもはや、戦いでどれほど

うまく行ったか国に帰って報告することができなくなった。

saget 17例のうち7例<sup>16</sup>が現在形、10例<sup>17</sup>がリズムの関係で過去形の語尾-eが省かれたものである。(8)はその1例であり、sagetの部分分割揚音(gespaltene Hebung)になっている。分割揚音とはgebenのgeのように短母音で終わるアクセントのある音節の場合、それがひとつの音節をなすこともできるが、リズムの関係で音楽の8分の1音符に相当すると見ることでもでき、アクセントのない次の音節と合わせてふたつで1音節とみなされるものである。ここはもし縮約形seitとすれば完全に強弱交代のリズムになるのに、そうはせずsagetとしているところを見ると、この作品では縮約形は押韻にのみ、行中ではすべて本来の形を用いることが意識的に区別されていると言うことができるだろう。

16 328,3. 549,2. 614,3. 1127,4. 1389,1. 1404,2. 1629,1.

17 232,3. 467,4. 490,1. 580,4. 590,1. 701,1. 709,4. 773,1. 1571,1. 1693,1.

ところで例(8)の1行目最初のDie Hetelen reckenは2行目のdaz文に入るべき文成分であるが、先行する文の先頭に置かれ、これがdaz文中の人称代名詞siで改めて受けなおされている。これもMhd.によく見られる、韻律を整えるための表現技法のひとつである。また、2行目のgar kleineは強い否定のgar nichtを意味する曲言法(Litotes)の一種である。(9)ではsageteの語尾-eに2次強音があり、この前行のカデンツは3音節のklingendになっている。

(10)はクードルンが、自分たちを救いに来てくれたヘルヴィークの軍勢が城の周りを包囲していることを知らせてくれた侍女に感謝する場面であるが、sagete derの部分は上に示したように4音節のタクトになっている。このような例はもう1個所<sup>18</sup>あるが、我々のテキストでは他のところは例(8)のように語尾-eを省いて4音節を避けているのだから、これらもそれに合わせsagetとするか、あるいは末尾の母音を省いたsagteにする方が適切であろう。

(11)はそのようなsagteの例である。ここはハゲネの娘でのちにクードルンの母親となるヒルデが、彼女に求婚するためヘゲリンゲンの国からヘテレ王が遣わした使者で歌の名手ホーラントをモールンクとともに、そうとは知らずに密かに自分の部屋に連れてくるよう頼む場面で、sagteは間接話法の接続法である<sup>19</sup>。

(12)は前つづりge-の付いた唯一の例である。ここは娘ヒルデを連れ去られ激怒したハゲネがヘゲリンゲン国を急襲し、剣を振るい槍を投げて多くの高貴な騎士を倒した場面で、1行目のderは直前のvil manic ritter edeleを受ける指示代名詞であるが、集合的に単数になっている。これもMhd.にはよく見られる統語現象である。ところでこの前つづりは行首余

18 man sagete ze allen ziten, (716,4a)

x | ˘ ˘ ˘ | ˘ x | ˘ | ˘ ^ |

彼が戦いで恐ろしい傷を負わせたことが始終噂された。

19 sagteは直説法過去で次のようにもう1例あり、語尾は母音衝突のため、ないものとみなされ、強弱交代のタクトになっている。

er sagte ez sinen mannen und ouch der küniginne. (635,3)

x | ˘ x | x | ˘ x | ˘ | ˘ ^ |

彼は家臣たちに、また王妃にもそのことを話した。

剰音(Auftakt)に当たり、韻律上は不必要であり、時制上もとくに必要ではないのに、なぜここだけgeが付いているのかよく分からない。F. ボイムルによれば<sup>20</sup>、これまでの編者も皆この形を採っている。

ところでsagenには前つづりver-が付いたversagenの過去分詞の縮約形がこの作品には2例見られ、いずれもverseitが行末にきてmagetの縮約形meitと韻を踏んでいる。それらの用例を示すと、

(13) Der einer sprach zem recken: „iu ist alsô verseit,

x | x̂ x | x̂ x | - | x̂^ | x|x̂ x|x̂ x|x̂^ |

ez habe einen friedel diu hêrlîche meit, (775,1-2)

彼らの一人が勇士に向かって言った。『かの高貴な乙女には  
(誰よりも愛している)恋人があると言って、

あなたの求婚が断られました。

(14) ez hête niht ir grûezen deheiniu im verseit. (1632,2)

x | x̂ x|x̂ x | - | x̂^ | x|x̂ x|x̂ x|x̂^ |

どの乙女も彼[=ハルトムオト]に挨拶を拒まなかった。

『ニーベルンゲンの歌』ではversagenの過去分詞は押韻で縮約形が5個所<sup>21</sup>ある他に、次のように行中で本来の形versagetが1例現われ、この形で強弱交代のリズムが守られている。

(15) vride unde suone sol iu vil gar versaget sîn. (Nib. 2090,4)

| x̂ x|x̂ x | - | x̂^ | x|x̂ x|x̂ x|x̂ x|x̂^ |

和平も和解もそなたたちには一切お断りいたす。

以上sagenの縮約形と本来の形の用法を概観してきたのであるが、これらの用例数を一覧表にして示しておこう(カッコ内の数字は押韻数で内数)。

20 Vgl. Bäuml, S. 185.

21 leitと3個所(156,1. 2151,4. 2156,4), breit(801,4), gemeit(1646,3)とそれぞれ1個所ずつである。



表1 sagenの過去分詞および人称形の使用例数

	Nib.	Kudr.
geseit(PP)	52(52)	27(27)
gesaget(PP)	12(4)	5(0)
gesagt(PP)	1(1)	0
gesaget(3.Sg.)	1(0)	0
saget(3.Sg.)	4(0)	17(0)
sagt(3.Sg.Präs)	4(0)	0
sagt'(3.Sg.Prät.)	10(0)	0
seite(3.Sg.)	1(0)	1(1)
sagete(3.Sg.)	18(0)	30(0)
gesagete(3.Sg.)	0	1(0)
sagte(3.Sg.)	12(0)	2(0)
sageten(3.Pl.)	9(0)	12(0)
sagten(3.Pl.)	7(0)	1(0)
verseit(PP)	5(5)	2(2)
versaget(PP)	1(0)	0

## 2. lâzenの縮約形

### 2.1. lâzenとlân

『クードルン』にはlâzenの語形は全部で53度現われる。それらは動詞が30度、助動詞が23度であり、そのうちそれぞれ7度と3度の合計10度lâzenが行末にきている。その他に前つづりgeが付いた動詞の不定詞gelâzenが1例前行末に見られる。これに対しその縮約形lânは動詞11度と助動詞9度の20例見られ、それぞれ11度と6度の合計17度行末である。

『ニーベルンゲンの歌』ではlâzenはgelâzen2例を含め58例すべてが行中で、lânは72例中68度とほとんどが行末で、はっきりと押韻のため

に区別されているが、『クードルン』ではlâzenも 53 例中 10 度、lânが 20 例中 17 度というように、lânの方が率ははるかに高いけれども本来の形 lâzenも相当数押韻に利用されており、sagenの場合と反対である<sup>22</sup>。先ず lâzenの用法から見ていこう。lâzenの動詞 30(うち押韻が 7)の内訳は不定詞が 18(4)、過去分詞が 10(3)、1 人称複数接続法が 2(0)である。一方、助動詞 23(3)の内訳は不定詞が 19(3)、1 人称複数接続法が 4(0)で過去分詞はない。それらの中からいくつかを示すと、

(16) der wirt hiez sîne geste ir arbeite lâzen. (187,3)

x | x̄ x | x̄ x | - | x̄^ | x | - | x̄ x | - | x̄^ |

城主は客人たちに競技をやめるよう命じた。

(17) ir sult ouch ungedanket niht den gesten lâzen. (306,3)

x | x̄ x | x̄ x | - | x̄^ | | x̄ x | x̄ x | - | x̄^ |

あなたもこの客人たちに感謝しないでいてはなりません。

(18) Nu lâzen wir beliben wie ez im ergê. (630,1)

x | x̄ x | x̄ x | - | x̄^ | | x̄ x | x̄ x | x̄^ |

さあ、彼の様子はひとまず置いておこう。

(19) Nu lâzen disiu mære. (563,1a)

x | x̄ x | x̄ x | - | x̄^ |

さあ、この話はここで置いておこう。

(20) ir segele nider lâzen wurden sâ zestunt. (290,2)

船の帆は即座に降ろされた。

(21) ich kan des niht gelâzen, ich engrüeze iuch vil willicliche.

x | x̄ x | x̄ x | - | x̄^ | (538,4)

私はそなたに心から歓迎の挨拶をしないではいられない。

例(16)の不定詞lâzenは「やめる」の意味の他動詞で 4 格のir arbeiteを目的語にとり、次行のgesâzenと韻を合わせている。(17)はP. ピーパー(Paul

22 lâzenの押韻相手は不定詞が gesâzen(187,3), mære(306,3. 713,4), mâzen(709,3. 993,3), strære(758,3), strâzen(734,3)、過去分詞が mære(952,3), strâzen(87,4. 811,3)で末尾の子音が欠ける場合もある。

23 Kudrun (bearbeitet von P. Piper), Anm. zu 306,3.

Piper)がungedanket lâzenは*den Dank unterlassen*の意味<sup>23</sup>であると注釈しているように、目的語の代わりに過去分詞が用いられた構文で、このような用法ではこのようにとくに過去分詞に否定のun-が付いたものがlâzenとともに用いられることが多い<sup>24</sup>。(18)と(19)はどちらも1人称複数に対する接続法の例で、いわゆる勸奨法であるが、(19)は主語wirが省かれてリズムが整えられている<sup>25</sup>。

(20)は動詞の過去分詞lâzen10例のひとつで、唯一の受動の例であり、nider lâzenで「降ろす」の意味である。この作品には『ニーベルンゲンの歌』と同じように、過去分詞にNhd.のような前つづりge-の付いた形は1例も見られない<sup>26</sup>。

(21)は前つづりge-の付いた唯一の例である。ここは後行の副文を先取りする指示代名詞desが部分の2格でnihtにかかり、nihtがgelâzenの4格目的語になっている。後行のengrûezeの否定辞en-は否定的意味の動詞に従属する副文に現われる無効の(pleonastisch)否定である。一般にNhd.の話法の助動詞に当たる助動詞とともに用いられる不定詞にはMhd.ではしばしば前つづりge-が付けられるが、この作品ではlâzenの場合、ge-が付くのはこの例だけで、あとの13例では例(17)のように単独の不定詞である<sup>27</sup>。ここでは『ニーベルンゲンの歌』の2例<sup>28</sup>と同じように、韻律を整えるためにこの前つづりが付けられたと考えられる。

ところでlâzenでの押韻は前つづりver-の付いた動詞verlâzenにも1例あるのでそれも見ておこう。

---

24 Vgl. Paul/Mitzka: Mhd. Grammatik, § 291. 当該個所にはこの例も挙げられている。

25 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse: Mhd. Grammatik, § 399(=Paul/Schröbler, § 270). このようなwirの省略はlâzenだけに限ったものではなく、シュレーブラーはその例として『ニーベルンゲンの歌』からbindenとrûmenの2例を挙げている。

26 ge-の付いた過去分詞は、例えばgelâzenが『イーヴァイン』と『パルツィヴァール』に1例ずつ、『トリスタン』に3例、縮約形gelânが『トリスタン』と『イタリアの客人』に1例ずつ、すべて動詞に見られる(武市修「lâzenの用法について」『関西大学独逸文学』第48号73ページ参照)。

27 例(17)以外に543,1. 709,3. 734,3. 764,3. 843,4. 851,2. 895,3. 1049,1. 1062,2. 1106,4. 1210,2. 1442,4.

28 武市修 同上書 51ページ参照。

(22) swaz ir der künic hête, der wolte er vil wênic verlâzen. (693,4)

王は所有している限りの馬を少しも

残しておこうとはしなかった。

ここは、モール人の王ジーフリトに攻め込まれたヘルヴィークから援軍を乞われたヘテレ王が、遠征軍に参加する騎士にその準備のため惜しげもなく馬や衣装を分け与えることを述べて、君主としての気前のよさを示す描写である。前行のirはその前に出てきたros(軍馬)を受ける複数2格の人称代名詞でswazにかかっている。後行最初のderはそれを指す指示代名詞でこれもwênicにかかる部分の2格である。Mhd.では不定関係代名詞に当たるswazの文ではふつうこのように部分の2格が現われ、主文中で内容的にはswazの文を受けるべき代名詞が単数ではなく、swaz文中の2格の複数名詞を受ける複数になる。Nhd.の語感からすると奇異な感じがする。この例ではverlâzenが前の行のstrâzenと韻を踏んでいる。ところで、この例のvil wênicも例(8)のgar kleineと同様、曲言法の一つでgar nichtの意味である。

次にlâzenの縮約形lânについて見よう。lânの動詞11例の内訳は不定詞が10(10)度と過去分詞が1(1)度ですべてlânで押韻している。助動詞9(6)例は不定詞が7(5)度、過去分詞が1(1)度そしてwirに対する接続法が1(0)度である。これらについてもいくつか用例を示そう。

(23) wir muosen si lân beliben. (562,4a)

x | x̄ ∪ ∪ | x̄ x | x̄^

我々は彼女たちを残してこざるを得なかった。

(24) Nu swîgen wir der degene; ich wil iuch lân vernemen, (1165,1)

x | x̄ x | x̄ x | x̄ x | x̄^ | x | x̄ x | x̄ x | ∪ ∪^

勇士たちの話はひとまず置いておこう。

それより皆さんにお話したいのは、

(25) Ir vart wir lân beliben und wellen ahten daz, (1695,1)

x | x̄ x | x̄ x | x̄^

彼らの旅についてはひとまず置いて、次のことに目を向けよう。

(26) ich hân si ligen lân / dâ nidere bî der flüete.(1281,1b-2a)

それ[=洗濯物]はこの下の海辺に置いてきました。

先ずlânが行中に現われる3例を見ると、これらの例ではいずれもlâzenでなくlânの形で強弱交代のリズムがとられている。また同じbeliben lânでも(23)と(25)では意味が異なり、(25)のbeliben lânは(18)のbeliben lâzen同様(24)のswîgenに当たる。このように押韻したりリズムを整えるのに、詩人はさまざまな表現を試みるのである。(25)のlânはリズムの関係で文頭にはきていないが、例(18)のlâzenと同じく接続法現在の勸奨法であろう。(26)はlânで押韻する例で、このlânは助動詞の過去分詞である。ここは次行のdanと韻を踏んでいるが、この作品ではこのように長母音の押韻相手がmanやbeganなど短母音の語も多く、押韻技法に未熟さが見られる<sup>29</sup>。

## 2.2. lâzenとlânのその他の形

lâzen, lân以外には『ニーベルンゲンの歌』では先ずlâzetが21度すべてirに対する使役の助動詞で行中に現われる。その縮約形lâtは80例で、その内訳はirに対して77度(うち動詞が5度)、そのうち命令形が76度、3人称単数現在が助動詞3度<sup>30</sup>である。80例中押韻は1例のみである。これに対し『クードルン』ではlâzet形は少なく動詞でirに対する接続法が2例のみ、lâtは42例で1例のみ押韻。42例の内訳はirに対し35度(うち動詞が3)、そのうち命令形が30度、3人称単数現在が7度(うち動詞が押韻で1例)である。それらの例もいくつか挙げてみよう。

29 例えばlânの押韻例17の相手は不定詞がergân(826,2), gân(223,2. 539,1. 1351,1. 1551,1. 1599,1), getân(536,2. 646,2. 781,1), hân(376,1. 395,1. 1340,1)の他に短母音の語 began(225,2), man(123,2. 382,2), 過去分詞が dan(87,1. 1281,1)の2例である(アンダーラインは助動詞)。

30 先の論考(武市修「lâzenの用法について—押韻技法の観点から—」関西大学独逸文学第48号53ページ)ではlât80例がすべて使役の助動詞でirに対する命令形であるとしたが、これは誤りで、命令形は76度で、他にirの人称形が1例と3人称単数が助動詞で3例ある。ここでお詫びし訂正したい。

(27) daz ir mich ledic lâzet in mînes vater rîche. (1557,3)

x | x̂ x | x̂ x | x̂ | x̂ | x | x̂ x | x̂ x | x̂ | x̂ |

私を自由にして父の国に帰らせてくれるよう(お願いしたい)

(28) ir enlât mich ungewâfent, frouwe, für iuch gân. (652,2)

姫、あなたが私に武装を解いてあなたの前に

行かせてくれなければ、(和解ができません。)

(29) ob dich des genüeget, daz er dir wider lât

dîn lant und ouch dîn erbe und ouch die bürge drinne,

もし彼がそなたにそなたの国と遺産とまた (1641,2-3)

国中の城を元どおり委ねることをそなたがよしとするなら、

(27)のlâzetは動詞 2 例中のひとつで、この節の 1 行目の外交的接続法の文Nu bæte ich iuch gerne(できればそなたにお願いをしたいのだが)に従属する文中なので接続法である<sup>31</sup>。(28)のenlâtのlâtはirに対する使役の助動詞の接続法で否定辞en-とともに除外を表わし、この文は*wenn nicht*の意味である。(29)のlâtは 3 人称単数現在形 7 例のうちの唯一の動詞で、また、lât 42 例中の唯一の押韻例でもあり、前の行のhâtと韻を合わせている。

文法書によればlâzenには不定詞、過去分詞以外に直説法、接続法ともすべての人称形と命令形に縮約が可能である<sup>32</sup>が、この作品では上で見た形以外に、縮約形はduに対する人称形と命令形に現われる。duに対する人称形はどの作品にも用例が少なく、『ニーベルンゲンの歌』には本来の形lâzest 1 例と縮約形がウムラウトしたlæstが 1 例であった<sup>33</sup>が、『クードルン』には他の作品にはない縮約形lâstが、次のように助動詞と動詞に 1 例ずつ 2 度見られる。

31 もう 1 例(1161,3)も同様の文で接続法である。このような文ではgânのような不定詞が省かれていると解釈することも可能であろうが、筆者は不定詞を伴わない用例はすべて動詞として分類している。

32 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 287.

33 武市修 同上書 71 ページ参照。

(30) ich enweiz welher dinge du mich, edele fürste, lâst engelten.

|x̄ x| じじ|x̄ x|x̄ x |x̄^|

高貴な勇士よ、どんなことのためにそなたが私に (1258,4)

償いをさせようとするのか私には分かりません。

(31) wem lâst du mich <...>

x | x̄ x | x̄ ...

oder wes sol ich mich armer weise tröesten? (1263,4)

あなたは誰に私を委ねるのですか、また、

見捨てられた哀れな私は何を頼りにすればいいのですか。

上のふたつの例は、クードルン救出のためヘゲリンゲンから大軍がノルマンディーの海岸に近づいたとき、上陸する前に斥候に出たクードルンの婚約者ヘルヴィークと彼女の弟オルトヴィーンが、冬の凍てつく海岸で洗濯仕事をさせられている彼女と忠実な侍女ヒルデブルクを発見した場面である。ふたりをそのまますぐにも連れ帰ろうというヘルヴィークに向かってオルトヴィーンが、それは潔くない、一緒に連れ去られた乙女たちも同時に救出するために取り敢えずこの場は一旦そのまま引き返し、改めて翌日軍勢を引き連れて戻ってくると主張する。例(30)はクードルンがそんな弟に向かって言った言葉、例(31)は小船で去って行ったふたりの後ろから婚約者に向かって叫んだ言葉であり、例(31)は写本の損傷のため、はっきりと復元できないが、どちらもこの形で強弱交代のリズムが守られていると思われる。

縮約形はその他の人称形には見られないが、duに対する命令形に助動詞として本来の形lâz 8例と並んで、縮約形lâが動詞に1例と助動詞に3例の4度見られる<sup>34</sup>。これらは命令形であるからもちろんすべて行中に現われる。それぞれ1例ずつ挙げてみよう。

(32) Si sprach: "lâz mich hœren, waz mir der herre dîn

ûz iuwerm lande enbiete. (403,1-2a)

彼女は言った。『そなたのご主君がそなたたちの国から私に

34 du に対する命令形は『ニーベルンゲンの歌』には少なく、本来の形が、強調の-aの付いたlâzaを含めて2例、縮約形lâが1例のみである。

どんな伝言を託したのか聞かせておくれ。

(33) Si sprach: „nu lâ dîn zürnen. si müezen wol genesen. (413,1)

彼女は言った。『そなたの怒りを捨てておくれ。

彼らの命を助けてやっておくれ。

上例はどちらも例(11)の続きの場面である。事前の計算どおり、彼の歌に酔いしれたヒルデから夜密かに彼女の部屋に呼び寄せられたホーラントが、主君の求婚を告げる絶好の機会はこの時とばかり話しを切り出す。例(32)はそのホーラントに向かって、ヒルデが詳しいことを聞こうとして言った言葉である。例(33)は、その場にヒルデ付きの侍従がやって来てふたりを見つけ詰問するのに対し、ヒルデがとりなす言葉である。他の10例も同じように行中に出てくるが、このlâはduに対する命令形中で唯一の動詞の例である。次の例にも見られるようにlâは必ずしも母音衝突の個所で用いられるわけではなく、アクセントの有無も関係しておらずlâzとlâの間には用法上どんな違いがあるのか明確ではない。

(34) si sprach: „mîn frou Kûdrûn, lâz dir wesen leit

x | ˘ | ˘ x | - | ˘ ^ | | ˘ x | ˘ x | ˘ ^ |

mînen starken jâmer und lâ mich niht verderben. (1505,2f.)

| ˘ x | ˘ x | ˘ | ˘ | x | ˘ x | ˘ x | ˘ ^ |

彼女は言った『クードルンさま、私の大きな悲しみを

哀れと思って、私を殺させないで下さい。

ここでlâzenについても両作品における過去形以外の用例数を表2に、主要な4つの形の語形別分類を表3に示してみよう（カッコ内は押韻数で内数）。



## 『クードルン』に見られる縮約形 その1

表2 lâzenの縮約可能な形の用例数

	Nib.	Kudrun
lâzen	56(0)	53(10)
gelâzen	2(0)	1(0)
lân	72(68)	20(17)
lâzet zu ir	21(0)	2(0)
lât (Imp. zu ir)	76(0)	30(0)
lât (zu ir)	1(1)	5(0)
lât (zu er)	3(0)	7(1)
lâz zu ich	4(0)	1(0)
lâz zu er	6(0)	0
lâze zu ich	4(0)	7(1)
lâze zu er	4(0)	6(2)
lâze zu wir	2(0)	0
lâzest zu du	1(0)	0
lâst	0	2(0)
læst zu du	1(0)	0
lâzent	1(0)	2(0)
lânt	1(1)	0
lâzâ (Imp. zu du)	1(0)	0
lâz (Imp. zu du)	1(0)	8(0)
lâ (Imp. zu du)	3(0)	4(0)

表 3 語形別分類

	Nibelungenlied		Kudrun	
	Vollverb	Hilfsverb	Vollverb	Hilfsverb
lâzen	16(0)	40(0)	30(7)	23(3)
Inf.	13(0)	33(0)	18(4)	19(3)
PP.	2(0)	1(0)	10(3)	0
1.Pl.Konj.	0	4(0)	2(0)	4(0)
3.Pl.Konj.	1(0)	2(0)	0	0
gelâzen(Inf.)	2(0)	0	1(0)	0
lân	30(29)	42(39)	11(11)	9(6)
Inf.	26(25)	42(39)	10(10)	7(5)
PP.	3(3)	0	1(1)	1(1)
1.Pl.Konj.	0	0	0	1(0)
3.Pl.Konj.	1(1)	0	0	0
lâzet	0	21(0)	2(0)	0
Imp. zu ir	0	16(0)	0	0
Ind. zu ir	0	3(0)	0	0
Konj. zu ir	0	2(0)	2(0)	0
lât	5(0)	75(1)	4(1)	38(0)
Imp. zu ir	5(0)	71(0)	0	30(0)
Ind. zu ir	0	1(1)	3(0)	1(0)
Konj. zu ir	0	0	0	1(0)
3.Sg.Ind.	0	3(0)	1(1)	6(0)
verlâzen	1(0)		1(1)	
verlân	10(10)		8(8)	
erlâzen	3(0)		0	
erlân	0		1(1)	
zelâzen	0		1(0)	

おわりに

sagenとlâzenの縮約形と本来の形が2作品でどのように使い分けられているかを事例に添って見てきたのであるが、両者に共通したところが多く、sagenについては縮約形はほとんどが過去分詞に現われ、それらはすべて押韻に利用されているのに対し、行中ではリズムを整えるために本来の形が用いられるというように、ほぼ使い分けがなされており、とくに『クードルン』では完全に区別されている。それ以外の縮約形はどちらにも3人称単数過去形に1例ずつしかなく、『クードルン』ではそれも押韻に用いられ、verseit 2例も含めて縮約形はすべて行末に、ふつうの形はすべて行中に現われている。『ニーベルンゲンの歌』でもその傾向は見られるが、過去分詞gesagetとgesagtでも全部で5例脚韻を踏んでいる。さらに、同じ形でありながら、sagtやsagteのように末尾母音のない形は『クードルン』にはわずかしかないのに対し、『ニーベルンゲンの歌』ではsagt形もかなり多く併用されている。

lâzenとlânにも同じ傾向が見られるが、こちらはsagenと反対に『クードルン』の方が本来の形も行末に現われることが比較的多くあり、lâzenのその他の形でも『クードルン』には押韻例がいくつか見られるのに比べ、『ニーベルンゲンの歌』では押韻はほとんどlânに限られている。ge以外の前つづりの付いた場合もerlâzen3(0), verlâzen1(0)に対しverlân10(10)と徹底している。しかし『クードルン』でも『ニーベルンゲンの歌』ほど徹底はしていないものの、zelâzen1(0), erlân1(1), verlân8(8)のように、全体としてはlânが押韻に、lâzenが行中にといいたい同じ傾向が見られると言うことはできる。lâzet, lâtについてはどちらも2人称複数に対する形がほとんどで、『ニーベルンゲンの歌』ではもっぱら助動詞であるが、『クードルン』ではlâzet形が動詞に2例のみしか見られないというような違いがある。動詞と助動詞の別では『ニーベルンゲンの歌』ではlâzen, lânとも助動詞の方が多いのに対し、『クードルン』は逆に動詞の方が多い。

最後にlâzenの過去分詞について見ると、前つづりgeの付く形はどちらの作品にもなく、『クードルン』では12例中10例が動詞のlâzenで、lân形は動詞と助動詞1例ずつともに押韻に利用されているのに対し、

『ニーベルンゲンの歌』では *lâzen* と *lân* が 3 例ずつと少なく、助動詞も 1 例だけである。

## Zum Gebrauch der kontrahierten Formen von *sagen* und *lâzen* in der Kudrun

— unter besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung —

Osamu Takeichi

In der vorliegenden Arbeit werden *sagen* und *lâzen* in der Kudrun behandelt, und der unterschiedliche Gebrauch der kontrahierten und normalen Formen beider Verben zum Reimen und zum Rhythmisieren wird erklärt. Dabei wird dieses Werk mit dem Nibelungenlied verglichen.

Im Nibelungenlied findet man die kontrahierten Formen von *sagen* überwiegend im Partizip Präteritum in der Form *geseit*, 52mal immer am Versende, zum Reimen aber dienen seine vollen Formen als *gesaget* viermal von 12 Belegen und als *gesagt* einmal. Kontrahiert erscheint dieses Verb außer im Partizip nur einmal in der dritten Pers. Sg. Prät. als *seite* belegt, und zwar im Versinnern.

Auch in der Kudrun begegnen die zusammengezogenen Formen von *sagen* hauptsächlich im Partizip II: *geseit* erscheint insgesamt 27mal stets am Versende, während die volle Form als *gesaget* nur fünfmal belegt ist und niemals zum Reimen dient. Außer im Partizip tritt die gekürzte Form von *sagen* auch hier nur einmal in der dritten Pers. Sg. Prät. als *seite* am Versende auf. Beleg Nr. (1) zeigt dieses einzige Beispiel. In der Kudrun werden also die kontrahierten Formen hundertprozentig zum Reimen gebraucht. Die anderen Personalformen von *sagen* erscheinen alle im Versinnern, wie im Beleg (2). Es ist ein Beispiel der normalen Personalform, allerdings ist die Endung „-e“ wegen des Rhythmus

weggelassen.

(1) *Hagenen den schaden man dô seite.* (Kudr. 453,4b)

(2) *Die Hetelen recken, den boten saget man daz,* (773,1)

x | -|x̂ x | -|x̂ ^| x | x̂ x | ∪ ∪ x | x̂ ^|

Bei Beleg (2) zeigt *saget* eine gespaltene Hebung, was an sich metrisch gar nicht problematisch ist, aber bei der kontrahierten Form *seit* würde dieser Takt zweisilbig sein und diese Zeile mit dem richtigen Wechsel von Hebung und Senkung ebenmäßig fließen. Trotzdem steht hier die normale Form. Die Gebrauchsweisen der beiden Formen sind also in der Kudrun klar unterschieden. Im japanischen Text sind verschiedene Belege analysiert angeführt. Die Tabelle Nr. 1 (S. 67) zeigt die Belege von *sagen* in den beiden Werken (die Zahlen in Klammern geben die zum Reimbezug benutzten Belege an).

Was *lâzen* und seine gekürzte Form *lân* betrifft, so sind die beiden Formen im Nibelungenlied zum Reimen sehr klar unterschiedlich benutzt: *lâzen* steht in allen 58 Belegen, einschließlich des zweimaligen mit der Vorsilbe *-ge* präfigierten Infinitivs, im Versinnern, *lât* hingegen dient 68mal von 72 Belegen zum Reimen. Diesen Unterschied erkennt man klar auch bei den mit einer anderen Vorsilbe präfigierten *lâzen* und *lân*: Hier findet man im Versinnern einmal *verlâzen* und dreimal *erlâzen*, am Versende hingegen 10mal *verlân*.

Im Vergleich dazu begegnet *lâzen* in der Kudrun 10mal von 54 Belegen, inklusive eines *gelâzen*, am Versende, während *lân* 17mal von 20 Belegen einen Reim bildet. Umgekehrt zum Nibelungenlied spielt hier die volle Form nicht bei *sagen*, sondern bei *lâzen* zum Reimen eine bestimmte Rolle. Das bestätigt ein Beleg von *verlâzen* im Reim, während *verlân* 8mal und *erlân* einmal allerdings zum Reimen dienen. Dieser Befund zeigt also, dass auch in der Kudrun von der vollen und gekürzten Form im großen und ganzen zum Rhythmisieren und zum Reimen getrennt Gebrauch gemacht wird.

Hinsichtlich der Personalformen *lâzet* und *lât* erscheint das erstere im Nibelungenlied 21mal im Versinnern, und zwar stets zu *ir* und das letztere reimt sich nur einmal von 80 Belegen, von denen es 77mal auch die Form zu *ir* darstellt. Zu *er* ist sie nur dreimal belegt. Sie spielen beide also fast gar keine Rolle zum Reimen. Die Kudrun zeigt die gleiche Tendenz, obwohl das Verhältnis von *lâzet* und *lât* sehr ungleich ist: 2 zu 42. Auch hier wird *lât* nur einmal auf *hât* gereimt (1641,1f.). Von 44 Belegen ist *lât* 7mal die dritte Pers. Sg. Ind. Präs. Alle anderen Belege zeigen die Form zu *ir*.

Als Personalform zu *du* findet man im Nibelungenlied je einmal die volle Form *lâzest* und die kontrahierte, umgelautete Form *læst*. In der Kudrun erscheint dagegen die unumgelautete, kontrahierte Form *lâst* zweimal.

Was das Partizip Präteritum betrifft, erscheint es in der Kudrun meistens in der vollen Form *lâzen* : 10mal als Verb und dreimal davon im Reim. Sonst ist es je einmal als Verb und als Hilfsverb in der gekürzten Form *lân* am Versende belegt. Im Vergleich dazu begegnet das Partizip im Nibelungenlied in der normalen Form *lâzen* dreimal (einmal davon als Hilfsverb) im Versinnern und in der kontrahierten Form *lân* dreimal als Verb im Reim. In den beiden Werken kommt es niemals mit der Vorsilbe *ge-* vor.

Die Tabelle Nr. 2 (S. 75) zeigt die Belege von *lâzen*. In der Tabelle 3 (S. 76) sind die Zahlen der nach den verschiedenen Formen eingegliederten Belege von vier Hauptformen von *lâzen* in den beiden Werken aufgeführt. (Zur Information sei gebeten, diese Tabellen zu sehen.)